

日系カナダ人の持つ地名の記憶

—バンクーバーにおける初歩的調査レポート—

本田 佳奈
HONDA Kana
(COE研究員・PD)

2006年10月、本COE海外提携機関派遣研究員として、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科（以下UBC）に2週間滞在し、バンクーバー市内の日系カナダ人についての調査をおこなった。明治初期以降およそ130年にわたる日系カナダ人と土地との関係はどのようなものであったか。土地、川、海、山といった自然環境に、日系移民はどのように対峙し、自身の故郷（home）を形成したのか。彼らが未知の土地で知ることとなる地名や新たに名付けた地名（公的な地図に載るようなものではなく、畑地、山、あるいは海岸線、河川を目印といったごく私的で用いる呼び名、通称地名）を地図化し、地名に関する聞き取りをおこない、記録はできないものか。それが派遣研究員を希望した動機である。

現在、バンクーバー市近隣には約2万5千人の日系カナダ人・日本人が住んでいる。移民の時期も明治～大正時代、戦前、戦後と様々である。日本人排斥運動のなかでの漁民の操業ライセンス獲得運動や労働組合結成の過程、第2次世界大戦中の日系カナダ人強制移動の経緯については新保満、佐々木敏二氏をはじめとする研究がおこなわれている⁽¹⁾。戦時中の統制によって各家庭では日本語で書かれた書類・文書の破棄を余儀なくされた。そこで、戦後UBCはかろうじて現存する資料の収集を始め、現在アーヴィング・K・ベーカー図書館のレアブックス・スペシャルコレクション（特別資料室）には30×42×5cmのボックス22箱に収められた日系移民資料を収蔵している。このような学術成果と呼応して、バンクーバー市内の日系カナダ人社会においても歴史研究が積極的に進められ、各機関

紙上に発表されている⁽²⁾。人種差別との戦い、カナダ社会への融合というこれまでの歴史背景のなかで避けて通ることができなかった世代間（1世と2世、2世と3世）ギャップ、これが、日系カナダ人社会のなかにある苦しみである。教育水準、日本語と英語の能力、文化の違い、そこから生まれる親子の隔たりは大きい。調査の準備段階で知識としては頭にあったが、聞き取り調査やUBCでの資料閲覧の過程において、その隔たりというものを目前に突きつけられた。しかし、そのような世代間ギャップのなかで、祖父母・親から自分へとつながる道筋を少しずつ明らかにしようと努力し続けるスタン府川氏（2世）、昌子夫人（3世）との出会いや3世である映像作家リンダ・オハマの作品を観たことは大きな成果であった。

そして地名の聞き取り調査については、事前に調査の糸口と目していた府川夫妻は、水安丸100周年記念式典の実行委員長として多忙を極めていた。しかし、夫妻の好意によって時間を頂き、スズキ・ベイ、ズンバン（網代場）、トタン・キャナリー、クサツバラ、中の宿などのフレイサー川流域の日本語の通称地名を教示いただいた。また、スティーブストン港やフレイサー川流域の漁業者からの聞き取りによって日本語地名のマップ化は可能ではないか、という意見も頂いた。この他に隣組（日系人協会、詳しくは下記調査記録4・6日）でもおこなったが、地名の収集という点から言えば十分な成果ではない。

しかし調査の後半、12～14日に行われた日系博物館主催による水安丸100周年記念式典のイベントでは、日加両方の日系カナダ人親族が一同に会する貴重な場面

に参加することができた。⁽³⁾ 日本（主として宮城県）からは80名以上の参加者がおりその大半が高齢者であった。こちらが研究者であると知り、UBC所蔵資料の内容について熱心に尋ねる方々もあった。Nikkei Imagesにおいても日本人が先祖探しのため来加し、日系の人々が調査に協力する記事を掲載している。移民という性格上、カナダのみではなく日本国内においても家族の歴史の道筋は見えにくくなり、それを明らかにしようとする熱意をもつ人々がいる。式典会場では外国で暮らす親族同士が静かに抱擁を交わす姿を見た。

そのような人々に混じって式典に参加するうちに、水安丸乗船者の出身地である宮城県北上川流域（旧東和町）と移住先であるフレイサー川両方での地名調査がより有効なのではないか、という思いが高まった。世代間ギャップ、日本とカナダという国の国とのギャップ。このなかで家族の歴史の筋は後から歩む者には見えづらく、何らかの不在を自身のなかに抱え込んでいくことになる。その隔たりは普遍的な一つの土台を設定することで、何か、動き出すことができないだろうか。わたしが考える土台とはやはり、地名を軸にした記憶の地図である。12日のシンポジウムでは、かつての移住地である及川島に今でも墓があるのか、と研究者に質問する老婦人があった。島の中には宮城県小牛田より⁽⁴⁾勧請した山神もあった。現在の及川島は無人工化し雑木林に覆われ、ハシケも崩れている。残念ながら13日のボートツアーに参加した人々も上陸できなかった。

地名と、土地に残す思い出を可能な限り地図に落とし込み、あらゆる人々が共有しうる資料とする。より広く深い歴史のありかたを見る一助とならないだろうか。また、日本語地名のみならず、カナディアン・ネイティブ地名、英語地名もまた織り交ぜてマップ化することで、フレイサー川の多様性のあり方も提示できるのではないだろうか。

このような課題を持ち、今回収集した資料を分析し、次の段階へと進みたいと考えている。

注

(1) 新保満『石もて追わるるがごとく』（大陸時報社、1975

年）、佐々木敏二『日系人カナダ移民史』（不二出版、1999年）、佐々木敏二・権並恒治『カナダ移民資料』（全11巻、不二出版）は「加奈陀同胞発展大観」「須知武道漁業慈善団体三十五年史」といったコミュニティ史、「BC州日本人電話帳」などの一次資料群、「足跡・山崎寧翁伝記」等の日系社会の尽力者の伝記など、日系カナダ人研究の必須資料を出版したものである。

(2) 日系市民協会の月報「The Bulletin: A Journal of Japanese Canadian Community, History & Culture」や日系博物館機関紙「Nikkei Images」など。

(3) 1906年（明治39）、宮城県牡鹿郡荻ノ浜より出航し、遠洋操業を目的にカナダへ入国。29名がパスポート不所持であったため一大事件となる。以後、及川甚三郎の指導のもと、多くの宮城県人がフレイザー川ライオン島（通称及川島）に定住し、鮭漁と缶詰工場での仕事に従事した（山形孝夫『失われた風景』未来社）。隣のライオン島（通称佐藤島・ソウエモン島）は同じく宮城県人の住居地。和歌山県出身者が大半を占める河口のステイブストン港とは異なる性格を持つ。記念式典の内容については下記の調査記録のとおりである。14日の夕食会については、この日が帰国当日であったため、どのようなものであったかについては明らかではない。

(4) 山形孝夫『失われた風景 日系カナダ漁民の記録から』未来社 221頁

調査記録（10月1～14日）

1日 バンクーバー着・UBC構内の図書館・施設見学。

2日 UBCにてアドバイザーである許南麟教授、アジアセンター研究員柴田裕子氏と面会。柴田氏は日系カナダ人女性の傍らに寄り添い、30年以上にわたるインタビューをおこなっている。調査について種々相談する。

3日 UBCアジア図書館にて論文・文献閲覧と調査準備。

4日 バンクーバー市内の日系カナダ人協会の一つである隣組へ見学。30年以上の歴史があり、書道・英語・子供のための教室など様々なプログラムが毎日組まれ、ボランティアによって運営されている。事務局長の牛島氏、スタッフの菅原さおり氏より話を聞く。その後市街の地図専門店にて調査用地図収集。フレイサー川流域と西海岸周辺地図（2万分の1、10万分の1、12.5万分の1縮尺）を購入。地名調査に必要な5千分の1縮尺地図は入手できず。

5日 UBCアジア図書館にて史料閲覧。

6日 隣組にて、一日ボランティアとして手芸クラブとランチサービス（参加者に和食のサービスを行うプログラム）に参加し、87歳～93歳の4名の女性（1、2世）から話を聞く。日本の出身地に関する記憶、移住の経緯、現在の生活など。

9日 リッチモンド市スティープストーン港よりボートにて巡検。日系移民に対するライセンス発給問題の舞台となった西海岸沿岸・ゴルフ海峡・アメリカ国境沿岸を見学する。

10日 ①水安丸100周年記念式典実行委員長であるスタン府川氏を訪問。夫妻よりスティープストーン港、フレイサー川流域に残る日本語地名（トタン・キャナリー、スズキ・ベイ、ズンバン、クサツバラ、中の宿）、府川氏の家族史、記念式典について短時間であるが聞き取りをおこなう。②ナショナル日系博物館・ヘリテージセンター見学。展示品入れ替で休館中のため、ミュージアムショップにて、博物館機関紙「Nikkei Images」（1996～2006年）、『Watari-dori, Birth of Passage』『Ganbaru the Murakami Family of Salt Spring Island』等、個人史の自費出版を中心に計8冊、3世の映像作家リンダ・オハマのドキュメンタリー映画「Obachan's Garden」を購入する。『Wataridori』（1915年に移民した和歌山県出身の漁民一家、1・2世の物語）を例にとってみると、出身地下村の風俗、川べりに次々と見えるキャナリーの風景、祝いの席のご馳走の品目、風呂の入り方といった記憶が、下村の言葉使いとともに細やかに描写されている。聞き取り調査の際に有効な手がかりとなる資料である。

11日 UBC特別資料室にて史料閲覧。農業、漁業、林業、鉱業のそれぞれの分野から一つの家文書を選び、『カナダ移民資料』をはじめとする先行研究では見られない個人の手記、手紙、ノート類（個人史や歌集、句集、脚本、大正8年度当用日記など）、1世へのインタビューのテープ起こし原稿を閲覧し、筆写する。

12日 ①前日に引き続きUBC特別資料室にて史料閲覧、筆写。②日系博物館・ヘリテージセンターにて、水安丸100周年記念式典。ドーン島・ライオン島に関する歴史・考古学的なパネル・ディスカッション。新田次郎『密航船水安丸』翻訳者による翻訳の経緯、歴

史学上の考察、ライオン島（通称及川島）の表面採取結果について3名のパネリストが講演した。130名前後の参加者があり、活発な質疑応答があった。

13日 リッチモンド市フレイサー川ドーン・ライオン島前にて行われた、宮城県移民記念碑の除幕式に参加。府川氏の話ではこの日、80名近い日本人出席者があった。島をめぐるボートツアーのチケットは1ヶ月前に完売した。その後、日系博物館にて及川甚三郎の特別展示を見学する。

14日 帰国

※ 今回の調査では、隣組のスタッフと会員の方々は、暖かくクラブの輪の中へ迎え入れてくださり、府川夫妻は多忙を極める中であったにもかかわらず、時間の許す限り、数多くの家族の歴史を教えていただいた。受け入れ先であるUBCアジア学科の許南麟教授とアジアセンター研究員柴田裕子氏からは的確なアドバイスを頂いた。チューターのオレグ・ベネシュ氏には通訳と調査の同行をして頂いた。この場を借りて謝辞を捧げたい。

[2006年10月31日受理、11月17日審査終了]